

〈「正解答」であるための三要件〉

- (1) 構文の正しさ (論理性) ……設問箇所と設問要求とに対応した正しい構文 (主一述、接続関係)
- (2) 内容の正しさ (客観性) ……本文の重要語句 (指示対象やKW) 中から必要なものを正しく適用
- (3) 表現の適切さ (一般性) ……比喩・具体例・特殊なニュアンスの「」等を用いない一般的表現

〈設問タイプ別 解答法〉

【1】同義置換 (どういふことか説明せよ) 最も基本的で重要な設問タイプ

- (1) 設問要求と傍線部を含む一文とから、正解の構文を確立する

→ 主(は) — 述(～である)ということ。 \*解答の構文は傍線部と論理的に一致すればよい  
→ 上記の構文で選択肢を絞り込む

- (2) (1)で残った選択肢の構文に本文中の「指示対象」「KW」を適用してさらに絞り、正解を確定する  
\*確定しきれない場合 → 傍線部を含む一文の中の他の要素と残った選択肢中の他の要素の対応関係で判断

【2】理由説明 (なぜか説明せよ)

- (1) 傍線部を含む一文に接続語や限定条件があれば、まずそれらを踏まえて選択肢を絞る。  
(例) 傍線部「したがって、Aは Bである」 → 「したがって」の前件を確認 (接続語)  
(例) 傍線部「その意味では、Aは Bである」 → 「その(意味では)」の内容確認 (限定条件)

- (2) 傍線部を含む一文の構文確認から理由のタイプを判定

→ 3類型に応じた解答導出過程と解答形式があるので、そのパターンに従って解く

(I) 論拠型: 評論に多出 傍線部の主題(A)に着眼・同じ主題についてのKW(C)を本文中で求める

問 Aは(主題) Bである(判断) (なぜそのように言えるのか)

答 Aは(主題) Cだ(前提判断) から(Bであるとと言える)

例 文化は、社会の変化や異文化との接触を通じ、常に動的に変化するものであるから。

(II) 動機・意図型: 小説に多出 主語(S)の傍線部時点での心情(Q)を本文中で求める

問 Sが(行為主体) Pした(言動・心情) (なぜそのようにしたのか)

答 Sは(行為主体) Qだ(動機・意図) から(Pした)

例 少年は友人たちの態度を見て、本心を説明しようと留まっても無駄だと感じたから。

(III) 原因型: 出題頻度は低い

問 E(ある事実・現象・結果 t<sub>2</sub>)が生じる(起こる・～になる) (なぜそうなるのか)

答 C(原因・先行事象 t<sub>1</sub>)が生じたから(Eが生じる・になる)

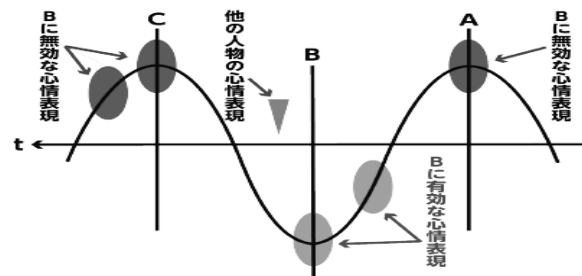
例 答 日本の行政実務家たちが旧弊な国内政権の意向ばかり配慮していたから。

【3】心情説明 (どういふ心情か説明せよ、など) 設問形式は多様であるが、解答の根幹は心情要素である

- (1) 設問要求と傍線部を含む一文(含む場面)とから、主体人物と時系列上の位置を特定する  
(例) 傍線部「(彼女は) かつて彼に言われたことを再び思い出していた」とあるが、このときの……  
主体(主語) 「彼女」が思い出している  
時系列の位置 かつて彼が言った(t<sub>1</sub>) → 彼の言葉を思い出した(t<sub>2</sub>) → 今再び思い出している(t<sub>3</sub>)  
解答要素 彼女は、かつて彼の言った言葉のある時思い出したが、それをまた思い出した今(の心情)

- (2) (1)の時点での、傍線部の主体の心情表現を、本文中のマーキング箇所から特定する(場面中の心情表現)

(例) 「(彼女には) それがか不安な種だった」「彼女は不安そうな顔を彼に向けた」



\*時系列が本文と異なっている誤答が多いので要注意!

- (3) (2)で特定した心情の「説明(a対象・b理由・c状態)」を確認する 何(誰)に対して、なぜ、どのように
- (4) 1. 上記(2)で特定した心情表現と選択肢中の心情表現箇所(基本的に述部)を照合する  
(例) 「不安」で絞る(気がかり、心配など言い換えに注意) → 2~3個の選択肢(①・③・⑤)が妥当  
2. 絞り込んだ選択肢について、さらに上記(3)の説明部分の要素と合致するか照合する  
(例) 上記「a・b・c」と一致する選択肢にさらに絞る → 1個の選択肢に確定(③)が妥当  
3. 確定しきれない場合、傍線部(を含む一文と隣接する会話)の表現ニュアンスを正確に反映する選択肢に絞る

【4】表現の説明 (単なる本文読解や内容理解ではなく、表現技法についての一般的な基礎理解が問われる)

- (1) 表現説明の3要素  
表現技法のタイプ・種別の指摘(の正誤) ……比喩・象徴・感覚的描写、語りと視点(焦点)、記号と表記など  
表現された内容の説明(の正誤) ……人物の心情、人物像、場面の印象、展開、筆者の主張(評論)など  
表現技法の効果・使用意図の説明(の正誤) ……具体的な想像を喚起する、現実味(リアリティ)、強調など  
(例) 本文中の「○○」「△△」のように、擬人法を用いることによって主人公の動揺する心情を生き生きと描いている。  
→ 検討1 「○○」「△△」は、どちらも本当に「擬人法」なのか?  
検討2 「○○」「△△」は、どちらも本当に「主人公の動揺する心情」なのか?  
検討3 「擬人法」によって「生き生きと」させることが可能なのか?

\* 「内容上の虚偽」「表現技法と内容との不整合」が多い。難しければ正誤判定を留保して次の選択肢に進むとよい。

【5】共通テスト特有の注意事項

- (1) リード文・注・設問文は、出題者からのヒント・メッセージとして重視する。
- (2) 図表(絵・写真・グラフ等)・資料(短文・法令・等)・対話などは、「本文」をメインとして、あくまでもその具体例類(具体例・引用・比喩の類)として扱う。具体例類は本文との関連を意識せよ。
- (3) 対話タイプの設問では、本文のKW、設問要求、対話の前後のつながり、選択肢の後半を重視する。
- (4) 対比構造型の選択肢では、メインとサブの項のうち、メイン側の正答条件で先に選択肢を絞る。(ただし、小説の「人物像の違いの説明」だけは、主人公を後にすること)
- (5) 「表現の説明」では、「表現の種類・タイプの指摘」(～によって、～で)の箇所と、「その表現の本文中での意味・内容の説明」(…を、…が)に誤りが多い。さらに、両者の関係の説明の誤答が多い。
- (6) 「構成の説明」では、「主題・結論・具体例類」の説明に関しての正誤判定に集中する。
- (7) 「適当でないものを選べ」では、明らかな誤り、本文との矛盾の存在が正解要件である。
- (8) 本文の最終センテンスは、読解時だけでなく、結論(全体要旨)確認問題の解答時にも再確認する。
- (9) 積極的に正答要件で選択肢を絞ったのち、2択程度で判定が難しくなったら、述部を集中的に比較してみるとよい。とくに理由説明では、「選択肢の述部 → 傍線部の述部」の確認を。
- (10) 一般に、選択肢の正誤判定中に微妙であると感じられたら、無理に確定しようと固執せず「判断の留保」を適切に行い、次の選択肢に進む。選択肢の途中で考え込まないこと。90秒で解くのが原則。